

変革のために必要なのは「情況」

2019年冬号

知の総合の「場」

こがのぼる
古賀 暹

(「情況」誌創刊者)

聞き手／菅原秀宣(編集部)

僕が『情況』誌を創刊したのが五十年前の一九六八年です。言わずもがな

当時は学生運動の高揚期で、もしかするとこの先現実を多少なりとも我々の思うように変革できるんじゃないかと少なからずの学生、若者が、そう直感しておかしくなかった時代でした。未来社会をどうしても構想してしまいたくなる力の強さは、若さとある程度不可分なんだろうと思います。だから、僕らみたいな古い時代の人たちの新『情況』への関与は、なるべく少な

いほうがいいと個人的には思っています。

——もし万が一に『情況』の再建ができたなら、十歳、可能なら二十歳くらい若い編集チームに早く引き渡したいと考えているのですが……

万が一にとか頼りないことを言うなよ(笑)。でもそれは是非やって欲しい。僕も前編集長の天下君もだが長くやりすぎたきらいはあるよね。なかなか引き受け手がないという問題もあるし、書き手はどうしても編集者に付くから、

ある程度しようがないのかもしれないですが。

——「変革のための総合誌」というのが『情況』誌のキャッチコピーです。当時、哲学者の廣松渉さんが古賀さんに百万円をポンと腹巻から出して、そういう雑誌を作りなさいとおっしゃった訳ですか。

最初そういう雑誌が必要だと思っただのは、僕自身の着想でした。社会学同再建をして、学生運動が高揚して、そこで周りを見渡すと、資本主義社会の

構造から革命は必然だ、みたいな理論やその変奏はたくさんできて、「打倒せよ!」「ウン千人の抜刀隊を!」みたいな話ばかりになっていく。でも、思想や理論の広汎化と深化がなければ駄目だろうと僕は感じていたんですね。

新左翼も含めた既成左翼全般への幻滅が僕の『情況』の出発点です。変革のために、個人各々と多くの人々が、何を共有してどう進んでいけるのかを考えていく必要があるだろう。そうなる



と、いろいろな領域の学問、文化を総合するような、豊かな知の「場」の創出から出発せねばという、かなり不遜なことを企図していたわけですから「変革のための総合誌」なんだよ(笑)。そんな発想を折々に周りに吹聴していたら、廣松さんが「面白そうだからこの

金で自由にやりなさいよ」と、そういう話なんだ。

——いい話ですね。第5期情況でもこのキャッチは是非引き継ぎたいと思います。

でも、当時の廣松さんじゃないけど新しいことを自由にやってくれなさいよと言いたい。資本の分析から信用の分析へ」の『負債論』関連とか、シェア経済は世界を変えるかとか、AIは悪魔か救世主かとか、仮想通貨で国家から自由になる運動がつかれないかとか、若い君たちが酒飲みながら議論しているような新しい話は本当に面白いと感じます。僕じゃ絶対思いつきもしないような話を読ませてください。指導部面して威張ってんのが前衛じゃなくて、真つ先に新しいことをやるから前衛なんですから。

新しいことをやるのが前衛だ